



成田の謡の歴史が収められているテープ



# 成田歴史玉手箱

●37回●

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

## 成田の謡

# 能舞台をつくるほど、謡に惚れた旦那衆

「このままでは成田の謡の歴史が消えてしまうと思い、関川先生から聞かされたという話を父(小野寺謹悟)に話してもらいました」と、20数年前に録音したテープを手にし語るのは、梅成会(観世流)の久保田きくいさん(並木町)。謡は謡曲ともいい、能の音楽部分のこと。テープには、明治時代に門前の旦那衆の間で盛んに行われていた謡の話やエピソードなどが収録されていました。

謹悟氏の謡の先生であった関川藤右衛門は、旧成田町役場の収入役を務め、昭和49年94歳で亡くなるまで謡一筋に生きた人です。明治30年ころ、藤右衛門の周りには門前の旅館業、醤油屋や畳屋などの旦那衆が集まり謡の稽古に励みました。このころ、「汽笛一声新橋を」で始まる『鉄道唱歌』の作詞者で知られる大和田健樹が、たびたび成田を訪れ大野屋旅館に宿泊していました。そのおり、偶然にも謡の会を知った健樹は謡曲『羽衣』を台本なしで謡ったところ、驚いた藤右衛門や旦那衆全員が健樹の弟子となったそうです。しかし、稽古があまりにも熱心過ぎて弟子たちが逃げ出してしまったというエピソードも残されています。

明治36年、健樹は不動明王の霊験にちなんだ謡曲『碓引』を作詞。大野屋では家の裏に能舞台を造ったり、自ら版元になって謡本を発行したりするなどの入れ込みようでした。その後『碓引』は、昭和19年、3世梅若実(54世梅若六郎)が能にして新勝寺に奉納。これが梅若と新勝寺との縁の始まりで、のちの梅若一門による成田山新能に発展します。

こうしてみると、成田の謡は、100年以上も前に関川藤右衛門が中心となりその基盤をつくり、大和田との出会いで花を咲かせ、梅若家と新勝寺の縁で大きく飛躍した



成田の謡の発展に大きな役割を果たした大和田健樹(左)と関川藤右衛門(右)

ことが分かります。『寛朝』、『興教』、『空海』は、新勝寺が第56世梅若六郎に依頼した新作能です。中でも声明(法要儀式の際、僧侶が節を付けて唱えるお経)と笙(雅楽の管楽器の一つ)を取り入れた『空海』は、海外公演されるほど有名な作品です。

「昭和23年、第55世梅若六郎に入門し、梅成会の名前は第56世六郎からいただいたものです。今では当時の様子を知る人や謡をする人が少なくなりました」と語る久保田さん。そんな中、門前の旦那衆やおかみさんたちによって、これまでの成田の謡の歴史を残そうと、「成田の謡を守る会」が結成されました。



明治42年大野屋での新築能舞台開き。舞台左が大和田健樹。写真には、演目「熊野」・明治42年6月20日と書かれている(木内光子氏所蔵)

### 編集後記

近ごろ新聞や折り込みチラシを見ると必ず目にするのが美容と健康に関する広告です。テレビも以前はお昼の番組くらいだったものが、最近は朝から晩まで「は体に良い」とか「××でやせる」とか。先月発表になった高額納

税者上位100人の中に美容・健康業界から15人も入っていたのもうなずけます。読者の皆さんも何かしら試されているのでは。心当たりのある人は17日からの成人検診(2・3ページ)で効果を確かめてみてはいかがでしょうか。